

Chapter 6 The Road Through College

Twists and Turns

アメリカ社会において、良い仕事を得るためには、高校以上の教育を受けなければいけないということが広く認識されている。多くの研究が示すように、高等教育の年数が、将来の収入、職業的地位と強く関連している。

例外はあるが、多くのアメリカの青年は高校をそれほど真剣に考えておらず、高校で重要なことを学ぶと思っていないし、成人の仕事の基礎になるものだと思っていない。

成人形成期には、学校は全く新しい意味を帯びてくる。幅広い可能性のある大学や職業訓練プログラムの中から選択しなければならない。大学では、十分に自己規律 *self-discipline* を発達させ授業を受け、課題に取り組みねばならない。大学においてステークスは高い（自分や親が大学に通うためにお金（もし単位を落とせば無駄になる）を支払っている）。したがって、学校は、愛と同様に、成人形成期においてより深刻なものとなり、成人の人生の基礎を築くことに焦点が置かれるのである。

高等教育は 21 世紀のサービス・情報・技術社会において仕事の必要要件であり、先進国において成人形成期において高等教育に参加することは標準である。アメリカの高等教育制度は成人形成期の延長を可能にしており、その期間、若者たちは幅広い可能性のある職業的未来を探索する機会を豊富に手にしているのである。

この章では、*emerging adults* の大学経験の様々な側面を検討する。

第 1： *emerging adults* がどのように大学を通じて彼らのコースを描くのかを検討し、また大学で成功するもの、もがき苦しむものを検討し、ヨーロッパの制度と比較することで、アメリカの制度を批判的に見る。

第 2： 学部学生は彼らの大学経験について何を言わないといけないのかを検討する。

第 3： 可能性のある将来のトレンド、MOOC とギャップイヤーの 2 つを検討する。

Charting a Route Through College

emerging adults の大半は大学で明確な目標をもたないが、将来のために、大学に通うことが重要であることはわかっている、なぜなら学位を持つ人は、持たない人よりも幅広い職業を選択することができ、お金を稼ぐことが出来るからである。彼らは、大学における非アカデミック的な楽しみ（さまざまな新しい人に出会うこと、性の冒険をすること、恋に落ちること、新しい友達をつくること、酒を飲むこと、両親から独立して生活を営むことなど）を期待している。彼らは学問分野について仮決定をしたのかもしれない。しかし、大学生の最終的な目標である職業についてしっかりした選択をする学生はほとんどいないのである。

アメリカの大学は何をしたいのかを見つけるための場所である。4年制の大学では専攻を決め

る前に、2年間でさまざまな可能性を試す(さまざまな授業を受ける)ことができる。そして、専攻を決めた後でも、いつでも変更することが出来るが、これは **emerging adults** の多くがしていることである。

このように大学で右往左往することはアイデンティティ探求の一部である。彼らはアイデンティティの問題、つまり「自分の能力と興味を考慮すれば、いったいどんな職業が本当に自分に合っているのだろうか」に答えようとし、大学は機会を与えてくれる。

Barbara, Ken, Elaine の例

一般的に、10代後半と20代前半(成人形成期の中心となる年代)は教育的探索を行う主な時代である。20代後半までには探索を終えて安定した選択を行い、それ以降はすでに選択し終えた分野において教育を受ける。親に強く影響を受けて専攻を決めて大学に入学してくる学生もいるが、自分のアイデンティティには合っていないことに気づくのである。

Rob, Cindy の例

Succeeding and Floundering

emerging adults の70%が高校から大学に進学するが、4年制大学に入学した59%の学生しか6年後に卒業しておらず、25-29歳の30%しか学士号を取得していない。学士号を取得している **emerging adults** も「4年間の学位」を取得するのに5、6年かかっている。中退率は2年制の学校に入学した学生の方がより高い。

大学入学後に立ち止まってしまうのには理由がたくさんある。大学教育を受ける心構えが不十分で、大学にいる理由がわからず、大学にコミットメントしていない、これらの結果さまよっているのである。彼らはそうするものだから、友人が行くから、親が行くことを期待しているから、惰性で大学に来たのである。

Cecilia, Danielle の例

大学に入学し、自己規律に欠けているために授業に参加し課題をできない学生もいる。

Jake の例

親が側にいた高校時代とは異なり、大学生生活の自由は扱いきれないものである。

大学の費用は、多くの学生が学位を得る前に退学してしまう理由の一つである。過去30年にわたって費用は上昇し続けており、70%の全日制の学生が仕事をしながら通学しており、59%が週に最低20時間の労働をしている。それでも、多くの学生は借金を抱えている。多くの学生は、特にキャリアパスの決まっていない **emerging adults** にとって、このような状況のなかで大学に居続けることは意味がないように思われる。しかし、経済的な理由のために退学してしまえば、在学年数分の借金を抱えるだけで、職場において学位を取得していることによる経済的な報酬を得ることは出来ない。

比較的貧しい家庭の学生は特に経済的な障害を報告する。図6.1参照。社会階層(“母親の教育水準”を指標)が低ければ低いほど、**emerging adults** は経済的な理由のために、十分な教育を受けられていない。貧しい家庭出身で高い教育水準を達成した学生は、大学の奨学金を得る機会に気づいていない。

大学の達成率は白人よりもアフリカ系やラテン系で低い。これは、アフリカ系・ラテン系アメリカ人は、貧しい地域で育つことが多く、低い質の学校に行く傾向にあるために、大学のアカデ

ミックな要求に対して心構えができていないせいである。

Nicole の例

早い時期からどんな仕事をしたいかわかっている emerging adults もいるし、彼らはキャリアの目標の進路に合った大学に入学する。彼らにとって、最初の 1, 2 年間の探索の期間は必要ではなく、彼らのアイデンティティに合った仕事を探すことが出来る。大学の目標は、自分に合っているとわかっている仕事を出来るようにするスキルと成績証明書を得ることである。

Gloria, Maya, Arnold の例

大学教育を終えるために 5, 6 年かかってしまうことに挫折を感じる学生もいる。彼らは 4 年間で 4 年の学位を取得できると考えていて、それ以上にかかるとわかると、無能感を感じる。20 代半ばの emerging adults が「この年齢までに達成したことに満足しているか」という質問に対して不満足感を表明する最もありふれた原因は、彼らが大学を完了できていないということである。

Casey の例

けれども最も典型的には、emerging adults は、教育を 20 代、30 代を通して続くものと考えている。大学は主に 18-22 歳のためのものであるという考えは急速に消えつつある。21 世紀の初めまでに、学部学生の半分が 25 歳以上であり、さらに、ある調査によれば、4 分の 1 の学生だけが学士の学位を取れたら教育を終えるつもりだと答えていることが明らかにされている。

emerging adults が、20 代、30 代を通して教育を続けようとするには様々な理由がある。1. 教育を受け続けることは、収入を増やすこと、2. より高い教育水準は社会的地位を高くするということ、3. 他人に、学位を持っていると言うことはある種の誇りであること。しかし、4. 学ぶ楽しさそのもののためにより高い教育を受けようとする人もいる。

Evaluating the American System

アメリカの若者の大半は、成人形成期の早期を、大学で講義を受けることに費やし、それらの講義は彼らのキャリアパスを明確にするのに役立つ。一部の学生は、その後も大学に残り、また一部は中退してしまうが、大半は学位が一つの目標である (4 年以上掛かるとしても)。開放的で柔軟性のあるアメリカの高等教育システムは、彼らが、パートタイムやフルタイムの仕事しながら、大学に通うことを可能にしている。

これはよいシステムなのだろうか。ヨーロッパの多くの国では、14, 15 歳までに大学進学準備をする学校、仕事や職業の準備をする学校に分かれる。高等教育に進学するものは入学前にとどの分野を専攻するかを決めなければならない、入学後はすべての講座が選択した分野に属する。

どちらのシステム (ヨーロッパ, アメリカ) にも長所も短所もある。

	ヨーロッパ	アメリカ
長所	中等教育を卒業する時点で、ちゃんとした仕事へのパスの途中にいて、10 代後半から 20 代前半をその職業における向上に費やす事が出来る。 大学入学時に、何を学びたいのかが分かっている、カリキュラムの中で 2, 3 年さまようということがない。	若者たちに様々な可能性のあるキャリアの方向性を試してみる時間がある。 ほとんどの若者たちは、高校卒業時にキャリアパスを決めていない。

短所	14, 15 歳ではまだ残りの人生のキャリアパスを決める準備が出来ていない。しかし、その後変更ができるような柔軟性がない。 大学入学後に分野を変更したいと思っても、変更することが難しい。	取り扱えないほどの自由と柔軟性が与えられる。 探索の期間として利用するのではなく、大学の講座に注意を向けず、アルコールを飲み、たいして勉強をしない。
----	--	---

14, 15 歳は将来のキャリアパスを決定するには、アイデンティティが十分に発達していない。自己理解は、様々な可能性を経験した結果、10代、20代前半を通じて徐々に発達するものである。

Stephan Hamilton は次の2つを区別している。

- transparency … 労働市場につながる教育制度を通じた進路の明確さ。
- permeability … 教育制度のなかである点から他の点への移動の容易さ。

アメリカ : transparency が低く permeability が高いということになる。成人形成期においてさえ、アメリカ人の大半は、どうすれば就きたい仕事につながる教育や訓練を得ることが出来るかほとんど理解していない。しかし、容易にある種の大学に入学できるし、進路を変える事も出来る。

ヨーロッパ : transparency が高く、permeability が低い。ヨーロッパの青年は仕事につながる教育や訓練について知っているが、一度決めた進路を変える事は難しい。

The College Experience

- アメリカの emerging adults は大学でどのような経験をしているのか。
- どのような教育を受けているのか。
- 何を学び、何を学び損ねたのか。
- 大学の間でどのように変わったのか。

これらは、長年の研究対象である。emerging adults が通う大学は多岐にわたり、研究大学、教養大学、コミュニティカレッジがある。大学経験の性質はまた、学生の目標や考え方にも依存する。

From Student Subcultures

Burton Clark と Martin Trow は 1960 年代初頭に、大学経験を記述する有用な方法を開発した。彼らは、以下の4つの学生の「サブカルチャー」を説明した。

- the collegiate … 社交クラブ、交際、飲酒、大きなスポーツイベント、キャンパスを楽しむことなどに中心が置かれ、教授、授業、単位は二の次である。彼らの大学生活における主な目的は、友人とパーティである。このサブカルチャーは特に大きな大学に多い。
- the vocational … 大学教育に対して現実的な見方をしている。よりよい仕事につくためのスキルや単位を得ることが大学の目的である。典型的に彼らは週に 20-40 時間働いている。こうした学生はコミュニティカレッジに多い。
- the academic … 大学の教育的使命を強く同一視している学生である。懸命に勉強し、課題をやり、教授を知ろうとする。

- the rebel … 授業で提供される考えに深く関わっている学生である。しかし、academic と異なり、彼らは教授を好み尊敬するのではなく、彼らを批判し専門に懐疑的である。授業を好み教授を尊敬するならば、課題を行い高い成績を取るが、授業を嫌い興味が無いと思えば、怠り低い成績を取るだろう。

1960 年代始めに Burton Clark と Martin Trow が提唱したこれらのサブカルチャーが今日の emerging adults に当てはまることを多くの高等教育の研究者は同意している。しかし、サブカルチャーのタイプとして見るべきであり、学生のタイプとして見るべきではない。多くの学生は、4 つのサブカルチャーが混ざり合っている。

4 つサブカルチャーは学生の異なる目標を表している。collegiate として楽しみを vocational として単位を、academic として知識を、rebel としてアイデンティティを求めている。77%の学生が「大学にいる間に、興味のあることをについてもっと学ぶこと」(an academic goal)を「とても重要である」と回答している。75%の学生が「特定の職業のための訓練を受けること」(a vocational goal)を意図している。しかし 52%が「人生の目的を見つけること」(a rebel goal)を目指している。

大学での楽しみについては、46%の学生が最近 2 週間に酒盛りをしたと答えていて、他のどの年代よりも多いが、学生全体の半数以下である。

Is College Wirth it? What the Student say

経済的な観点からは大学は価値あるものである。4 年制の学位の利益は疑いのないものである。大学卒業者の大半は、学位を持っているという利益を十分に意識している。

また大学教育についての調査に対しても好意的に回答する。あらゆる側面において、10 年前の調査よりも、大学で得るアカデミックな経験に対する学生の満足感は増加している。

では、アメリカの大学教育はすべてにおいて問題がないのだろうか。学生は一般的に教育について満足しているが、小さい大学で小規模の授業を受けている方が満足度は高い。the Princeton Review の調査によれば、小さい大学がポジティブな項目に対する回答の上位を占めており、大きな研究大学の方がネガティブな項目の上位を占めていた。

Kayla, Timothy の例

大学教育に満足しているのかどうかについて尋ねると、彼らの満足は個人の成長 personal growth という点で彼らが経験したことに主に基づいている。このテーマは、collegiate の楽しみの追求と rebel のアイデンティティの追求の組み合わせに、より体系化され責任をもつということが組み合わせられたものである。

Sherry, Ted, Linda の例

Ernest Pascarella と Patrick Terenzini の研究では、大学教育は学生に、アカデミック・非アカデミック・長期的な利益をもたらすことを報告している。

- アカデミックな利益：一般的な言語・量的スキル、言語・筆記コミュニケーション、批判的思考など
- 非アカデミックな利益：審美的・知的価値観の獲得、アイデンティティの明確化、社会的自信。独断的や権威主義的、民族主義的でなくなり、自己概念や心理的幸福度の増加。
- 長期的な利益：高卒者に比べて収入、職業的地位、職業的達成が高い。薬物依存、身体的・精神的問題、離婚率が低く、平均余命も長い。

大学に行くことは **emerging adults** にとって様々な報酬をもたらす。学費が高くとも、挫折や疎外感を感じようとも、大学経験にいくつか問題があったとしても大学に行くことは様々な点で有用なことである。

Waves of the Future? MOOCs ¹ and the Gap Year

アメリカで高等教育が変化する中で、2つの可能性のある変化について検討する。1つはすでに起こっている変化であるが、オンラインで講座を提供すること、もう1つは起こるだろう「ギャップイヤー」である。

Virtual Education: The Promise and Limitations of MOOCs

オンラインで視聴・議論できるように講義を録画するのであれば、学生が大学の近所に住み、ほかの学生や教授と一緒に同じものを見て議論するために教室に行くことは実際に必要であろうか。学生は依然として題材の理解に基づいて評価されなければいけないが、電子上で評価されることはできないのだろうか。

電子大学は、大学の学位を得るコストを大きく減らす可能性がある。お金がない学生、途上国の貧しい社会階層出身の学生、大学の少ない地域に住んでいる学生へ電子大学は知識の扉を開いている。MOOCs は高等教育の新しい時代を先導するというに私は懐疑的である。新しすぎてその効果について十分な研究がない。しかし、伝統的な大学の教室で学ぶほど、学生が MOOCs では学ばないと考えるにはいくつかの理由がある。

主な理由は、MOOCs は学生に個人的なイニシアティブ・集中・自己規律を求めるが、それは10代後半や20代前半の大学時代には多くの人が持ちえないほどのものである。MOOCs に登録した90%以上の学生が完了できず、10%以下の学生しか完了できていない。彼らのうちのどれほどの学生が、実際に題材を読んで理解しているかは不明瞭である。

MOOCs が教室の対人魔法をかけられるのだろうか。長い間教えている教授や4年以上大学にいる学生は、その魔法のワクワク感を知っている。議論が白熱し、新しい見方が作られ、誰も想像したことのないような見識が現れる。MOOCs がそのように刺激することはないだろう。それらは、生き方を変え、世界に対する見方を形作る瞬間であり、学生が何年も、何十年も記憶にとどめていくような瞬間である。

学生は、大学教育の中で学ぶ最も重要なことは個人的であり、対人的であると言う。教授はたんなる情報の源泉である以上に、尊敬でき刺激を与えてくれる人物である。教室の中だけではなく、他人との付き合い方、時間の使い方、責任の実行の仕方を大学は教えてくれる。アイデンティティを明確にすることを助け、学生が天職のようなものを見つけることを可能にする、様々な可能性を配置する。MOOCs が同様の目標を達成することは難しい。

私は MOOCs やそのほかのオンラインの講座をすべて退けようというわけではない。これらの方法によって効果的に教えられる科目もあるだろう。自動車工学や統計、光合成を学ぶのにだれも教室の魔法を必要としていないだろう（個人的なインストラクションが学習のプロセスを確かに助けるだろうが）。MOOCs を受講している大部分の学生は自己方向付けや自己規律を持ってい

¹ MOOCs : 大規模オープンオンライン講座 (Massive Open Online Courses の略)。

ないかもしれないが、持つものもある。電子的な方法は伝統的な教室をよりインタラクティブにする可能性がある。受動的な講義よりもアクティブラーニングの方がよく学ぶと研究は明らかにしているが、アクティブラーニングを促進するように電子的な方法は開発されるだろう。

MOOCsの可能性は、発展途上国の志があり動機付けられた **emerging adults** にとって最も大きいだろう。しかし、それらは大学制度に取って代わり、大学制度をだめにするのではないだろう。

What's the Hurry? The Promise of the "Gap Year"

「ギャップイヤー」とは、高等教育に進学する前に、成熟しそのほかの経験を積むために高校卒業1, 2年間使うということである。

アメリカにおいてギャップイヤーは珍しく、高校卒業を1, 2年意図的に待つ学生は1,2%しかない。しかし、イギリス、オーストラリア、イスラエル、北ヨーロッパにおいてはずっとありふれたものである。

ロンドン大学の研究者である Andrew Jones によれば、イギリスの **emerging adults** はギャップイヤーを取得することに以下のような動機づけを持つという。

- フォーマルな教育からの小休憩
- 人生により広い視点を得ること
- 個人的なスキルを身に付けること
- お金を稼ぐこと
- 他の人とふれあい、ほかの場所や文化を経験すること
- 地元であれ外国であれ、世界のためになることをすること

イギリスでは、「ギャッパー」はその経験において多様である。多くはただ仕事を探すだけであるが、海外で仕事を探したり、サービス期間でボランティアをしたりするものもある。

Jones の研究にレビューによれば、ギャップイヤーを取得することには様々な利益がある。ギャッパーは高等教育に進学する際、高く動機づけられているし、入学後は教育的パフォーマンスが高い。同じく欠点もある。ある種のフォーマルな活動が計画されなければ、無駄な年月を過ごすことになる。しかし、イギリスの **emerging adults** の大半にとって、ギャップイヤーを取得することは価値ある選択である。

ではなぜイギリス、オーストラリア、北ヨーロッパではギャップイヤーを取得することがこれほど一般的で、アメリカでは珍しいことなのだろうか。これは高等教育の歴史的、構造的な問題である。

イギリスやヨーロッパにおいては、高等教育が一つの職業領域に焦点を絞っているため、高等教育の講座を選択するために、十分にアイデンティティ（自分の能力や興味についての感覚）を発達させる必要がある。その結果、イギリスやヨーロッパの **emerging adults** はアイデンティティが明確になるまで待ち、選択を行う。

アメリカでは、最初の2年は幅広い分野の一般教育を受けるように構造化されているので、入学時に最終的にどこに焦点を絞る必要がない。大学の文脈の中でアイデンティティを発達させる時間が2年間ある。また1年間入学を延期することを許可している大学もあるが、大半はそうではない。アメリカの学生は大学卒業後に長期の仕事に就く前にギャップイヤーを取得するようである。アメリカールやティーチ・フォー・アメリカ、平和部隊のようなプログラムの参加者は主に大学卒業後の **emerging adults** である。

Conclusion: College as a Safe Haven for Identity Exploration

若者の大半は、少なくともしばらくの間は、大学に入学し大学生活を経験する。特に最初の2年間は様々な講座を受講し、高校時代に理解し損ねた一般教育の基礎を培う。彼らは可能性のある専攻を試し、能力や興味に合うものを探し、最終的には満足のいく選択をする。

しかし、大学は職業訓練以上の場であり、良い仕事を得るためのスキルを得るだけでなく個人的な成長を経験する場所でもある。

様々な点でアメリカの大学はアイデンティティ探求のために特別に設計されている。大学は、成人の生活にある責任から解放された、愛や仕事や世界観のアイデンティティの可能性について探究を行う、社会の残りの部分からは切り離された一時的な避難所なのである。

もちろん、必ずしもすべての責任から解放されているわけではなく、大部分の学生は学業に加え、パートタイムかフルタイムの仕事に就いている。それは忙しくストレスフルな生活の原因となっている。学生たちは全体的には満足しているが、ある側面(大きく疎外感を感じるクラス、無関心な教授など)には不満を抱いている。4年制の大学に入学した学生のうちかろうじて半数が6年後に学位を手に入れている。学位を取得した学生でさえも、授業料やその他の出費のために重い借金が背負うことになる。

これらすべては深刻な問題である。特に大きな大学において、学部教育は改善の余地が大きく残されている。半数の学生が、経済的な理由のために卒業できないという事実は嘆かわしいことである。にもかかわらず、大学はアメリカの *emerging adults* にとって広く刺激を与えるものであり続けている。キャリアにおける利点、個人的な成長、探索の機会と言う観点で大学が提供する約束は魅力的なものであり続けている。

もちろん、*emerging adults* の全員が大学に進学したいと望んでいるわけではない。パーソナリティ、興味、知的能力のために、学校を好まない(歴史や天文学英文学を学ぶことは苦痛のように感じる)。彼らは、仕事に直接応用で来る現実的なスキルを学ぶことを望んでいる。しかし、先進国のサービス志向の経済において、だれもが、他人がお金を払うサービスを提供できるように、ほかの大半の人が知らないことを知る必要がある。

クリティカルな結論は以下の通りである：小学校が19世紀に、高校が20世紀にそうなったように、高等教育は21世紀において自由で普遍的な権利にならなければいけない。4年制の大学だけではない。多くの *emerging adults* は、もし職場に直接応用できる現実的なインストラクションを受けることができれば、最も幸せで最高だろう。しかし、どの形態でも、*emerging adults* は現代の経済に適切に備えるためにある種の高等教育を必要とする。高等教育を受ける事が出来ることが、家族の経済資源次第であるべきではなく、社会の利益という点ですべての人に提供すべきである。

高すぎるだろうか。もちろん、その通りだろう。19世紀に小学校を、20世紀に高校を提供した時のように。しかし、いまでは誰一人そのことを後悔はしていない。事実、それらのない社会を想像することは難しい。21世紀の終わりまでには、我々は高等教育を同じように見るだろう。ヨーロッパ、日本、そのほかの先進国はすでに、高等教育を安価か無料にしている。世界で最も裕福な国であるアメリカが同じ事をしていても責められる謂われはない。